

# 領域間カリキュラム・マネジメントにおける実践的研究

— 中学校第3学年の体育理論と球技の実践から —

教科指導重点コース 造形・創造科学系

氏名：鷲野 祐一

## I はじめに

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編において教科の目標である「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために資質・能力の育成」が求められている。そのため、運動に対する興味・関心を高め、技能の指導に偏ることなく資質・能力をバランスよく育むことができるように学習過程を工夫し、充実を図ることが必要となった。これらを踏まえ、

- ①カリキュラム・マネジメントを踏まえた授業づくり
- ②体育理論の学習の充実
- ③男女共習化の実現を目指す授業づくり

を行う必要があると考えた。

そこで、本稿では「領域間カリキュラム・マネジメント」の視点を取り入れた中学校第3学年の体育理論と球技の実践から成果と課題を報告すると共に新たな保健体育科の授業モデルを提案する。

## II 主題設定の理由

### (1) 領域間カリキュラム・マネジメント

文部科学省(2017)の中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編において、新たに“各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進”が示された。

「児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくことと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと。」

#### 資料1 カリキュラム・マネジメントについて

文部科学省(2017)は、知識について「体の動かし方や用具の操作方法などの具体的な知識と、運動の実践や生涯スポーツにつながる概念や法則などの汎用的な知識を示している。」そして、「学習する運動種目等における具体的な知識と汎用的な知識との往還を図ったり、運動に関する領域と体育理論との関連を図る中で、各領域の特性や魅力を理解したりすることができるように、知識に関する学習指導の更なる充実が求められるためである。」と、明記された。このような体育授業での知識と知識の往還や関連を踏まえ、鈴木

(2017)は知識の明確化・体系化について「こういった知識を『関連付ける』『組み合わせる』『往還を図る』のは、教師の意図的な体育授業でこそ実現できるものであり、それを通じて運動・スポーツを『知る』ことができると思います。」と述べているが、知識を「関連付ける」「組み合わせる」「往還を図る」に関する具体的な方策については触れられていない。

また、中村(2017)は、小学校での教科・領域内におけるカリキュラム・マネジメントについて「こうした教科・領域の学習を、教科書通りの単元配列から、子どもにとって意味のある学びのつながりが生まれるように、意図的に関連させたり、時期を移したりして配列を組み直す作業が、カリキュラム・マネジメントの大切なところだと思います。」と述べているが、小学校の教科・領域内の考えであって、中学校の教科・領域内におけるカリキュラム・マネジメントの視点は明記されていない。また、日野(2018)は、体育理論領域と保健分野を関連付ける授業づくりについて「それぞれの分野での研究成果や知見を共有し、体育と保健の連携を強化していく必要がある。」と述べているが、体育理論領域と各領域に関連を持たせた授業づくりに関する記述は見られない。一方で濱田(2020)は、体育理論の授業におけるカリキュラム・マネジメントについて、「年間数コマの体育理論の授業は、時数が少ないからこそ、実施期間をコントロールしやすい。」と述べている。そのため体育理論領域を含めた教科・領域内のカリキュラム・マネジメントを用いた授業づくりは有効であると考えられる。

これらを踏まえて、教科等横断的な視点を用いて組み立てていくことで教育活動の質の向上につなげることが重視されているが、まずは、教科・領域内を横断的な視点で学習を充実させることが必要である。そのため、カリキュラム・マネジメントの定義(資料1)を参考に筆者が領域間カリキュラム・マネジメントを新たに定義づけした。内容は、(資料2)の通りである。

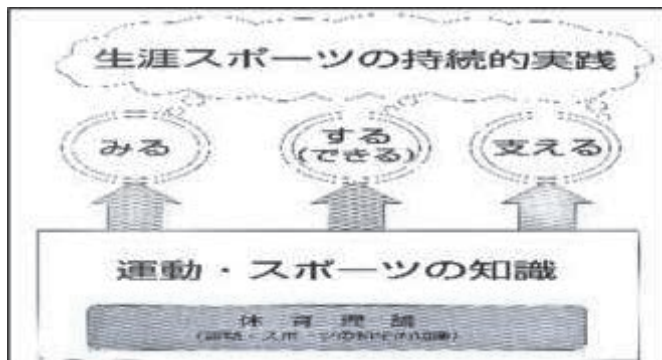
児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科内の各領域において独立して教育活動を行うのではなく、各領域間の学習内容に関連付けながら、組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと。(資料1を基に筆者が作成)

#### 資料2 領域間カリキュラム・マネジメントについて

## (2) 体育理論について

本研究は、体育理論領域と各領域を関連付けた授業づくりである。そのため、体育理論領域に先行研究を調査する必要があった。理論に関する領域は、「体育に関する知識」が始まりとされている。2007年(平成20)年に告示された学習指導要領で初めて「体育理論」に名称を変更された。文部科学省(2017)は、改善の具体的事項において『「する・みる・支える・知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成に向けて、運動やスポーツの価値や文化的意義等を学ぶ体育理論の学習の充実はもとより学習する領域が有する特性や魅力を理解すること、運動実践につながる態度の形成に関する知識を理解すること、保健で学習する健康・安全の概念と体育の分野で学習する健康・安全の留意点との関連を図ることなど、知識を基盤とした学習の充実が必要である。』と述べているが、改善の方針を示しているだけで方策については述べられていない。

佐藤・友添(2011)は、体育理論の必要性について「だからこそ、運動やスポーツを知的なレベルでとらえ、できることと同時に、運動やスポーツの仕方、あるいは運動やスポーツの原理や法則、そしてそれらの社会的な意味や文化的意義をわからせること、こういったことが重視される体育授業が求められているのです。」と述べ、体育理論の学習が生涯スポーツの実践の源であり重視すべきであると明記している。(資料3)

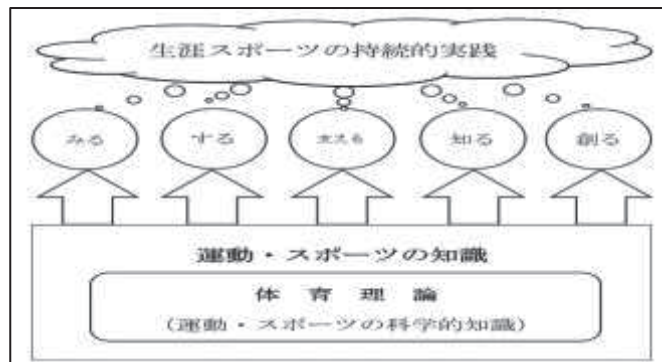


資料3 体育理論は生涯スポーツ実践の源  
(出典：佐藤豊・友添友則『楽しい体育理論の授業をつくらう』,大修館書店,2011年)

また、「そして、何より体育理論の授業の充実がこれからの社会における体育の存在意義を決めるように思います。」と述べていて、体育理論の学習を充実させることが保健体育科の授業づくりにおいて必要であると示唆している。体育理論が登場してから数年経過し、吉田(2016)は、体育理論の実施状況について「「雨降り体育(「雨降り用の『穴埋め番組』)」として、あるいは各単元の、例えばオリエンテーションの一コマとして実践されるレベルの扱いであり、決して系統立てて行われていたとは言い難い状況であった。」と述べており、

これまでの体育理論の授業を系統立てて行うことができていない現状を示唆している。

以上のことから、体育に関する科学的知識を学習する体育理論の学習を充実させることは、保健体育科の授業づくりについて必要な事であり、「する・みる・支える」だけではなく「知る」「創る」といった関わり方を踏まえて体育理論の学習を充実させることが保健体育科の目標でもある生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現することにつながると考えた。



資料4 生涯スポーツ実践の源(知る・創るの出現)  
(出典：佐藤豊・友添友則『楽しい体育理論の授業をつくらう』,大修館書店,2011年を改変)

## (3) 連携協力校の生徒の実態

連携協力校の生徒は、運動に対して積極的に捉えている生徒も消極的に捉えている生徒も存在する。体育の授業では、男女別に学習を展開している。保健や体育理論といった教室で行われる授業については、男女共に学習を行っている。特別支援学級は、通常学級と別に体育授業を展開している。また、昼放課には多くの生徒が校庭でバレーボールをする姿が印象的である。

上記の実態から、体育の実技に関して男女共に学習する経験がないことから性別差や技能差を超えて、多様な他者との関わりの中で学習すること、生涯にわたって豊かなスポーツライフを送るきっかけづくりにつながると考えた。男女別に学習が行われているという実態から男女共習化も視野に入れて授業づくりを行うこととした。文部科学省(2017)は、平成29年告示の新学習指導要領において、保健体育科の授業づくりについて男女共習化の推進をしている。そこで石塚・小松・鈴木(2020)は、男女共習化の授業について中学校第1・2学年を対象にまとめ、「技能面の差をどのように扱うかということに関する授業者の手立てが必要であると考えられている。」続けて生徒が授業中に感じていることについて、「性別に関するものが多く、生徒は授業中に男女を主に意識していることが明らかとなった。」と、報告しているが、中学校第3学年における男女共習化の保健体育の授業づくりについては触れられていない。そのため、中学校第3学年を対象として男女共習化の授業づくりにも取り組むこととした。



### Ⅲ 研究構想

#### (1) 研究の目的

上述したカリキュラム・マネジメントや体育理論に関する先行研究では、体育理論領域と運動領域を関連付けた授業づくりや具体策は見られなかった。また、教育に関する今日的な課題や連携協力校の実態を踏まえ、本研究の目的を以下の様に設定した。

連携協力校の生徒の実態を把握し、保健体育科の目標である生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために中学校第3学年における体育理論領域と球技領域を関連付けた新たな授業モデルを提案することを目的とする。

#### (2) 研究仮説と目指す生徒の姿

本研究の仮説と目指す生徒の姿を以下の通りである。

体育理論で学んだ科学的知識を活かして各領域で具体的な知識と汎用的知識を関連付けて、自分たちの実態に合わせて、誰もが楽しむことができるスポーツを創造することを通して、豊かなスポーツライフを実現するきっかけづくりができるだろう。

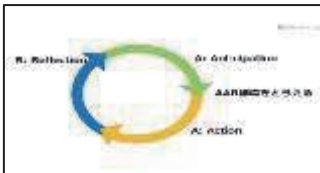
「知識と知識を関連付ける」を授業の中で具体的な姿で表すと以下の様になる。

- ・体育理論で学んだ知識を用いて、誰もが楽しむことができるスポーツを創造することができる。
- ・様々な違いに着目し、誰もが楽しむことができるスポーツを創造するためにルールや用具、行い方自ら調整して工夫して取り組むことができる。

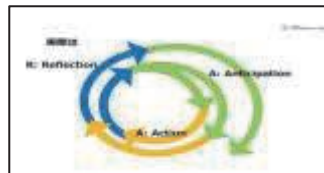
#### (3) 研究の手立て

##### 手立て①「AARサイクルを用いた学習の工夫」

AARサイクルとは、学びにおいて「見直し-行動-振り返り」を繰り返すことを意味していて、秋田(2020)は、「これをどうすればどうなるだろうかという予測・予想を立て、実際にアクションを起こす。自らの取組・経験を振り返り、そこで得た気づきや学びをまた次の予測・予想やアクションにつなげていく。」と、述べている。このAARサイクルの考え方をを用いることで螺旋状に深い学びを展開できると考え取り入れた。



資料5 AAR サイクル



資料6 螺旋状のAAR サイクル

##### 手立て②「課題解決に向けた話し合いの工夫」

誰もが楽しむことができるスポーツを創るために、①体験を基に経験から課題を共有し、課題を解決する時間。②頭だけではなく実際に体を動かしながら課題解決する時間。を設け、誰もが楽しむことができるスポーツの創造に向け、ルール、用具、行い方の3点に焦点を当てて改善点を話し合えるように工夫した。

#### (4) 検証方法

##### ①授業内の生徒の様子から分析

授業実践(i・ii)共に活動の様子を撮影した映像を基に、体育理論の学習やルール作りの学習を通して、どのように生徒の姿に変化があるのか分析する。

##### ②抽出児の変容観察と振り返りシートの分析

授業実践(i)は、生徒を3名抽出し、振り返りを基に分析を行った。授業実践(ii)は、生徒を数名抽出し、振り返りを基に分析を行った。

### Ⅳ 研究に関わる授業実践と考察(i)

#### (1) 教師力向上実習 基礎における試行的実践

対 象：愛知県公立中学校第3学年A組(33名)  
 期 間：令和2年12月～令和3年2月  
 単 元：H. 体育理論(文化としてのスポーツの意義)  
 E. 球技「ネット型」(シッティングバレーボール)  
 ～自分たちだけのスポーツを創ろう！～

#### (2) 教材の価値について

シッティングバレーボールは、バレーボールとは異なり座ったままで行うバレーボールのことである。健常者も脚に障害を持った人も含めて多くの人が楽しむことができるスポーツである。教材を選択した理由は以下の2点である。

- ①性別差を超えて多くの人に親しまれているから。
- ②体育理論の学習との関連を考慮し、ルールや用具の工夫について考えやすいため。

#### (3) 単元計画

時数	学 習 内 容
1	【オリンピックが行われている本当の理由とは？】 ・オリンピック競技大会の意義について考える。 ・スポーツの文化的な役割を知る。
2	【運動やスポーツの文化的意義やはたらき】 ・スポーツの文化的意義・働きについて知る。 ・人々を結びつけるための方法を知る。
3	【自分たちのスポーツを創ってみよう！】 ・自分たちだけのスポーツ(Our Sports)を創るためにルールや行い方を考える。
4	【自分たちのスポーツをやってみよう！】 ・Our Sportsを実際にやってみる。 ・Our Sportsをより楽しくするために、ルールや行い方を改善する方法を考える。
5	【自分たちのスポーツをより楽しくしてみよう！】 ・自分たちのスポーツをさらに楽しくするために、意見を共有し、ルールや行い方を考え再考する。 ・再構築したOur Sportsを実際に行ってみる。

資料7 試行的実践における単元計画

#### (4)授業の実際と考察

本単元では、体育理論領域と球技領域を関連付けた試行的実践を展開した。体育理論で学習した運動やスポーツに関する科学的知識を球技領域で活かすことでⅢ-(2)で示した目指す生徒の姿になり、結果として生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するきっかけにつながった。また、誰もが楽しむことができるスポーツを Our Sports と題し、知識を活用して新たなスポーツを創造することができるという具体的な姿を目指し、生徒の学習を基に単元計画を随時変更していくこととした。以下は、授業の実際と考察である。

教科書の記載例通りで授業を行えば、スポーツの文化的意義から始まるが、体育理論領域をただ単純に配列することなく、教科・領域内の学習をよりよいものにするために東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が開催予定であったことから、第1時では、国際的なスポーツ大会の文化的な役割について学習することとした。第2時では、スポーツの文化的意義と文化的な働きについて学習を進める。ここでは、保健体育科の目標に関わって生涯スポーツの考え方や多様な人々を結びつける文化的な働きを持っていることを知る。そこで、文化的な働きを達成するために、道具や用具、ルールや行い方を工夫することが必要であることを学んだ。これらは、単元を通して重要となる知識であるため既存のスポーツを例に説明を加えた。第3時では、これまでに学んだ知識を用いて“シッティングバレーボール”を題材として、誰もが楽しむことができるスポーツを創造するためにPC室に移動し、新たなスポーツを考える時間を設けた。より議論が活発になるように全員にシッティングバレーボールの動画を見せた後に「ルール」「用具」の工夫に焦点を当て、教師側からは3点だけ制限を加えて話し合いをさせた。

- ①題材は、“シッティングバレーボール”とする。
- ②ネットの高さは、1.10mとする。
- ③チームは、男女混合とする。(比率は問わない)。

#### 資料8 教師側からの制限について

上記の制限を加えて、学級で話し合いを行った結果、Our Sportsルール(資料9)を創造することができた。

- 1. ワンバウンドあり。
- 2. 5回以内に返球する。
- 3. サーブは2回まで可能。
- 4. ボールは、ソフトバレーボールを使う。
- 5. サーブブロック禁止。
- 6. ネットの高さは、1.10mとする。

#### 資料9 試行的実践における Our Sports ルール

前時で学んだ知識を活かし、Our Sports を創造した結果、抽出児3名(A, B, C)は以下の様に述べている。

A:ルール1つでも有利・不利が決まってしまうため、慎重に考えていけないといかんし、考えた内容を多角的にみて誰にとっても良いものになるかなどと深い部分まで考えていかないとと思った。多くの人から自分が思いつかなかったアイデアがでてきて良かった。  
B:みんな手を挙げないのに意見を否定されちゃって少し悲しかったです…。おしりをつけるのではなく、足の裏を付けたら、ネットもバドミントンのネットの高さで良いのかなと思いました。悪口禁止(〇〇〇が考えたやつ)はとってもいいなと思いました！授業は楽しかったです！  
C:見ている方は座ってバレーをしているだけだけど、いろんな人たちが楽しく安全にできるようにさまざまな工夫がしてあるんだなと思いました。いろんなルールを新しく考えたけれど、全然思いつかなかったので、それぐらいルールが完ペキなんだなと思いました。

#### 資料10 第3時における抽出児の振り返り

誰もが楽しむことができるスポーツを創造するためには、ルールの工夫が必要であると身をもって感じることができた生徒やみるだけではなく、実際に考えて気づくことができているため、この学習は、学んだ知識を自ら考えることを通して再確認するために必要な時間であったと考えられる。

第4時では、体育館に場所を移し、実際に Our Sports を検証する時間となった。誰もが楽しめるスポーツを検証する1つの材料として、担任の先生(社会科)を含めて検証することになった。自分たちで初めて創ったスポーツであるため、ほとんどの生徒が楽しむことができたため、誰もがという点で「性別差」「年齢差」を超えて人々を結びつけるスポーツの実現になったと考えられる。しかし、「技能差」についてはまだ課題が残ると判断し、次時で再構築する時間を設けることとした。この時、抽出児は以下の様に振り返っている。

A:サーブをするときの位置がチームによってバラバラだったから、バックラインの後ろからサーブをするというルールとサーバーが同じような人ばかりだったから必ず1周するというルール、2つを加えたらもっと平等に楽しく行えると思った。  
B:私は参加できなかったけれど客観的に見て、みんな手がとどくところは動かないし(手がとどかなくても動かない)ただくつろいでいる様に見えました(笑)ボールのサーブがとどかないのならばコートの中からはじめるとかして、バレー部にハンデとしてコートのうしろから、というルールにしたらいいと思いました！  
C:楽しかったけれど、サーブで決まってしまうことが多かった。低いところに来たボールを打ち返すのがとても難しかった。座っているのでサーブを全力で打つと、コート外に出てしまうことが多い。何バウンドしたか分からなくなった。

#### 資料11 第4時での抽出児の振り返り

以上の記述から、頭で考えたルールを実際に身体を動かして検証すると、ルールの曖昧さに気づくことができた。また、抽出児Bの様に見学の立場から気づいた点も共有し、誰もが楽しむことができるという目標



を達成するために何度も try & error を繰り返してよりよいものを目指すことが大切であると考えられる。この他にも、前時でサーブの回数の緩和だけを行った結果、サーブ位置や方法に関する工夫をしていないことに気づき、多くの生徒が困難さを感じてしまった。そのため、ルールを再構築する時間を設けた。すると、

- ・ 試合時間を短くしてハラハラするスポーツにする。
- ・ サーブゲームになっている現状を打破するために、サーブの位置と方法に関するルールを追加する。

という、2つの考え方のもと全員で再考した結果、Our Sports ルールは新たに以下の4つが追加された。

- 7. 試合時間は5分
- 8. サーブの位置は、エンドラインから。
- 9. サーブ者は、毎回変えること。
- 10. 膝立ちOK。

**資料12 話し合いの結果、追加された Our Sports**

第5時では、上記のルールを加えた10個のルールでOur Sportsを実施した。また、前時の抽出見Bの「動けていなかった」「くつろいでみえる」という記述から授業改善を踏まえ、導入にお尻歩き(資料8)を取り入れた。サーブに関するルールを工夫とお尻歩きを授業で取り入れた結果、前時と比較して以下の3点の変容が見られた。



**資料13 お尻歩き**

- ・ 手を後ろについて相手からの返球を待つ姿
  - ・ ボールの行方に対して、手を使って動く姿
  - ・ 誰もが攻防に参加できるようになった姿
- 以上の生徒の様子から、お尻歩き(資料13)を取り入れた結果、あぐらをかいていた生徒は足を伸ばし、次の動きにすぐ動けるような姿(資料16)へと変容した。



**資料14 第4時での生徒**



**資料15 第5時での生徒**



**資料16 攻撃に参加する生徒**



**資料17 ブロックを試みる生徒**

サーブに関する課題を解決するためにルールを追加した結果、これまで消極的だった生徒が積極的に攻撃に参画する姿が見受けられた。また、膝立ちのルールは攻撃のみならず、ブロックを試みる生徒も増加し、

相手の動きを意識して作戦を立てボールを持たない動きに着目して攻防することができたと考えられる。この単元を通して、以下の様に振り返っている。

- A:自分たちで創ることによって有利にも不利にでも傾いてしまうから、天秤を水平に保てるように性別・体格に関わらずに全員が楽しめるようにルールを工夫しなければいけないなど改めて強く感じました。
- B:みんな平等の難しさ、シッティングバレーボールだとしてもボールをあつかっている部活(バレー、バスケ、ハンドとか)の人たちは上手。コートは広く感じたけど、6人だとせまい→ぶつかってしまうため声かけが重要だと知った。
- C)前回よりもルールがきちんと決められていたので、とても楽しかった。僕らのチームは1回サーブを打ったら場所を変えるという方法をしていたので、全員がバランスよく打てたので良かったです。立ちひぎのおかげでサーブが入りやすくなった。

**資料18 単元を通した振り返り**

単元を通した生徒の様子や振り返りから、Our Sports が楽しくなった要因は以下の3点であると考えられる。

- ①自ら「サーブゲームになってしまう」という課題に対して、ルールを新たに追加し、課題解決する経験を通して、サーブ以外での得点機会が増加し、誰もが得点することができるようになったから。
  - ②試合時間が極端に短いとゲーム中の点差が開くと、意欲低下が見られた。そのため、5分という勝敗が最後まで分からないハラハラ感を感じたから。
  - ③誰もが楽しむことができるスポーツを創る活動を通して、自分たちの実態に応じて課題を発見し、いつでもルールを工夫する環境が整っていたから。
- これらの要因が関連し、得意、不得意という「技能差」「性別差」「体格差」などに関係なく、誰もが楽しむことができるスポーツを創造するという目標を達成することができたと考えられる。以上の考察から本実践の成果と課題を以下の様にまとめた。

**(5) 成果と課題**

○成果

- 体育理論で学んだ知識(形式知)と実際に身体を介して気づく知識(暗黙知)の両方を関連付けて、ルールや行い方を工夫することができた。
- 教師が提供する簡易化されたゲームよりも自分たちの実態を把握し、誰もが楽しむことができるスポーツを創造することができた。
- 運動やスポーツの新たな関わり方として「創る」という関わり方を見付けることができた。

▲課題

- ▲体育理論の時間が十分に確保できていない。
- ▲Our Sports を創造する前に、題材とする既存のスポーツを知る時間が必要である。
- ▲「体格差」「性別差」「年齢差」は超えることができたが「技能差」については課題が残っている。

運動やスポーツを「みる」「調べる」ことで「知る」ことができる形式知だけでなく、実際に身体を動かし「行う」ことで「知る」ことができる暗黙知の両方を「知る」ことで知識と知識を関連付けて、ルールや行い方を再考することで新たなスポーツを創造することができた。教師側がルールや行い方を指定し、既存の簡易ゲームを提供するのではなく、生徒が自ら学んだ知識を活かす過程を通して、より生徒の実態に即したスポーツを創造することができた。また、生徒の発言から授業改善を行うことでより実態に即した体育授業の実現に寄与することができた。

以上の3点から体育理論領域と球技領域に関連付けた授業を展開することで、体育授業における「体格差」、「性別差」などを超えて、誰もが楽しむことができるスポーツを創造することができた。また、運動やスポーツへの多様な関わり方として「する・みる・支える」だけでなく「知る・創る」といった新たな関わり方を生徒も教師自身も知ることができる授業実践となった。成果と課題から、次年度では授業者も考えを再構築し、新たに単元を増幅させて実践を行った。

#### IV 研究に関わる授業実践と考察(ii)

##### (1) 教師力向上実習Ⅲにおける授業実践

対象：愛知県公立中学校 第3学年(237名)
期間：令和3年10/11(月)～11/1日(月)
単元：H. 体育理論(文化としてのスポーツの意義) E. 球技「ネット型」(シッティングバレーボール) ～Our Sportsを知ろう! 創ろう! 楽しもう!～

##### (2) 単元計画

時数	学習内容
1	【オリンピックが行われている本当の理由とは】 ・オリンピック競技大会が行われている本当の理由について知る。
2	【あなたにとってスポーツとは何だろう?】 ・現代生活におけるスポーツの文化的意義を知る。
3	【スポーツが持つ文化的な働きって何だろう?】 ・スポーツが持つ文化的な働きを知る。 ・ルールや行い方を工夫しているスポーツを知る。
4	【シッティングバレーボールを知ろう!】 ・シッティングバレーボールを実際に体験する。
5	【自分たちだけのスポーツ(Our Sports)を創ってみよう!】 ・自分たちのスポーツ(Our Sports)を創る。
6	【自分たちだけのスポーツ(Our Sports)をやってみよう】 ・自分たちで創ったOur Sportsを検証する。
7	【自分たちだけのスポーツ(Our Sports)を再構築する!】 ・Our Sportsをより楽しめるように工夫する。 ・見つけた課題を身体を動かしながら解決する。
8	【篠りんびっく楽しもう!】 ・自分たちで篠オリンピック競技大会を運営する。

資料19 教師力向上実習Ⅲにおける単元計画

##### (3) 評価規準

知識・技能	①スポーツの文化的意義について理解したことを言ったり、書いたりしている。②③ ②伝統的なスポーツ大会の文化的な役割について理解したことを言ったり書いたりしている。③④ ③人々を結びつけるスポーツの文化的な働きについて理解したことを言ったり書いたりしている。④
思考力・判断力・表現力等	①学習した知識を活用し、多様な関わり方や楽しみ方について具体例を挙げ自己の言語や図表を通して、他者に加えている。② ②様々な違いに配慮して、仲間とともに球技を楽しむためのルールや行い方の工夫について、具体例を見付け、それらを他者に伝えている。③ ③球技の学習を踏まえて、自己に適した「する、みる、支える、知る、創る」などの多様な関わり方を見付け、それらを他者に伝えている。④
学びに向かう力、人間性等	①文化としてのスポーツの意義を理解することを通して、「思考し判断したことを学習活動などに展開して取り組もうとしている。② ②様々な違いに留意すると共にOur Sportsの学習に自主的に取り組もうとしている。③ ③それぞれの違いに着目し、それらに応じた課題や修正の方法などを取り入れようとしている。④

資料20 単元の評価規準に即した生徒の具体的な姿  
(4) 振り返りシートの変化

本実践から、振り返りシートをMicrosoft Formsを用いて記述させることとした。振り返りを集計する中で頻出ワードを瞬時に把握し、何に課題意識を持っているか明確になるため導入することとした。



資料21 振り返りシートの変化

##### (5) 授業の実践と考察

本実践の分析を学習の展開を5段階に分け、授業の実践と考察を述べていく。本実践は、生徒の学びと共に学習を変化させる典型教材の1つとして提案する。

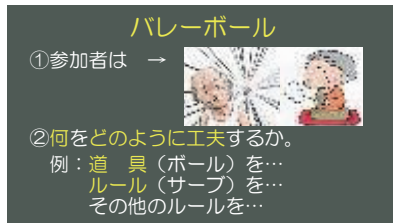
###### 【第1時～第3時】“思考と私考”

第1時は、国際的なスポーツ大会の文化的な役割について学習する。導入時、オリンピックが行われている理由を自分なりにまとめ、自分の考えを持った上で学習に参加させた。まとめでは、行われている理由を確認し、自分の思考と私考の変容をみるることができた。

第2時は、スポーツの文化的意義について学習する。ここでは、自分自身がスポーツをする理由と年代別に行われている理由の相違を学び、ここでも思考と私考の違いに触れさせ、1時間を通して思考を働かせた。



第3時では、スポーツの文化的な働きについて学習する。人々を結びつけるために様々なスポーツでは、「道具や用具」「ルールや行い方」を工夫していることに気づかせる。また、2時間後のスポーツを創造する学習に見通しを持たせるために“バレーボール”を題材として、中学生と高齢者が一緒にできるスポーツにするためにどのような工夫ができるかを考えた。(右図)



思考を働かせて、自分たちのルールを構築することができた。その後、世間では“バレーボール”を題材として、障害の有無等関係なく誰もが行うことができるスポーツ“シッティングバレーボール”の存在を伝え、次時において試行する時間を設けた。授業終盤では、次時の学習に見通しを持たせるために、ルールに関する動画とコート、ネットに関するルールを踏まえて7つのルールを復唱・確認を行い、場の設定は、コートの広さ10m×6m。ネットの高さ1.10mにとした。

1. 座ってプレー
2. 3回以内に返球する。
3. サーブブロック OK
4. ラリーポイント制。
5. プレー中は、お尻を床から離さない。

資料22 シッティングバレーボール体験時のルール



資料23 コート・ネットの実際

【第4・5時】“試行から思考へ”

第4時では、シッティングバレーボールを体験した。



資料24 第4時でのシッティングバレーボールの体験

実際に試行すると、難しさを感じる生徒も多い中、ルールについて改めて思考しサーブブロックを行う生徒や相手のサーブに対して準備する姿勢などが増加していった。前時で映像や資料を通して知ったスポーツを実際に行ってみて、生徒は振り返りで以下の様に記述している。

・男女でやってもそれほど差がなく、一緒に楽しめた。見た時はネットが高いように感じたけれど、下からサーブをすればわりと入った。最初は皆お尻で移動するのに慣れていなくて、あまり自分の場所から動かなかったので、一回目はワンバンOKにして練習するともっと慣れるのが早くなると思った。

・イメージしていたより難しく大変でした。足をあまり動かせない分上半身をたくさん動かさなければいけないので、普通のバレーボールより疲れるかもしれません。このルールでスピード感を出せる選手の人はすごいなと思いました。

・最初は、普通のバレーより面倒くさくて、楽しくないかと思ってたけど、やってみたら、普通のバレーより楽しくてびっくりした。

資料25 生徒の振り返りの記述

実際に試行した結果、ルールを工夫すれば自分たちでも楽しむことができるという思考が働いた。また、イメージとは異なり、やってみて初めて楽しさを知ることができている。このことから、誰もが楽しむことができるスポーツを創造する前に、既存のスポーツを試行することでより思考を働かせて学習に取り組むことができたと考える。(手立て②の成果)

第5時では、上記の経験を活かして、誰もが楽しむことができるスポーツを創造する活動となった。以下は、授業の様子である。

第4時で試行して感じたことや困難さから思考してルールや行い方の工夫を考える時間であった。難しかった。楽しくない。つまらなかった。という意見も抽出し、それらを楽しむための工夫を考えるために、まずはグループで意見を共有し、全体で取り決めという流れで授業を進めた。すると、この学級でのルールは以下の通りである。



資料26 意見を共有する姿



資料27 授業の実際

※下線部は今回新たに追加されたルールである。

1. 座ってプレー
2. 3回以内に返球する
3. サーブブロックなし
4. ラリーポイント制(5点マッチ)
5. プレー中は、お尻を床から離さない
6. サーブは投げても良い
7. リベンジサーブあり
8. ボールは、ソフトバレーボールを使う
9. 点が入ったチームはローテーションする
10. ワンバウンドあり

資料28 Our Sports ルール

前時での「試行」を基に「思考」し、誰もが楽しむことができるスポーツを創造する活動を通して、生徒は以下のように記述している。

・体育の授業でずっと両手首を縛ってやるのはちょっと大変だと思うけど、クラスのレクとかでやってみるのは面白そうだなと思った。また今度新しいルールでやってみて、前よりももっとたくさんの人がボールを触ったりラリーが続いたりするといいなと思った。やっぱり男女だと力の差があるので、皆の差がなくなるようなルールをつくると全員で楽しめると思う。」

・ルールの改善について話し合いをしてみると、ルールの改善に色々な意見が出ていて、楽しいと思った人もいれば、難しいと思ってる人も結構いるんだと思いました。

・スポーツのルールを考えてみて、考えてる内にいろんな面白い案を考えられてすごく楽しかった。スポーツは、やるだけが楽しいのではなく、考えること、作ることも楽しいということがわかった。

**資料 29 第 5 時における生徒の振り返り**

振り返りから、男女の性別差に気づく生徒や様々な考えを知ることができている。また、スポーツを「する」だけでなく、「考える」「作る」ことも楽しいと言っている生徒も存在し、目指す生徒の姿に近づけていると考えられる。

**【第 6・7 時】“思考から試行へ”**

第 6 時では、自分たちで創った Our Sports を実際に検証した。自分たちで創造したこともあり、第 4 時と比較して多くの生徒がやりやすさを実感している。しかし、経験を基に頭で考えたルールでは実際に検証すると相違が生じ、授業を通して感じた困難さを振り返りに記述させた。すると、「サーブ」「ラリー」といったルールそのものに困難さがあると明らかとなった。このことから思考から試行することで課題に気づき、新たな思考を生み出すきっかけとなった事が窺える。以下は、第 6 時における生徒の振り返りである。

・ワンバンありだと前よりラリーが続いて楽しかった。でもワンバンありだったら、ボールは硬い方が良いなと思った。座りながらボールを投げ入れるのは難しかったので、サーブは前回の方が簡単のように感じた。ローテーションすると、みんながいろいろな役割を楽しめて良いなと思った。

・前よりラリーが続きやすくなったし、サーブも入るようになった。サーブを両手で投げ入れるのは逆に難しかった。ワンバンしていいと、たくさんラリーが続けられた。

・ボールを変えて、サーブを投げて良いというルールを加えてみて、サーブを入れるのが難しい人でも簡単に相手コートに落とすことができたり、ボールが柔らかいのでサーブボールが飛んできてあまり怖くないという人が増えたと思います。ワンバウンドをありにしたことによって、前よりチームでのパスが続くようになりました。みんなでルールを考えて、そのルールを追加したことでやれるようになったことがたくさん増えたと思います。

**資料 30 第 6 時における振り返り**

これらの記述から、実際に行うことでルールの検討の曖昧さに気づき自分たちの課題を明確にすることができた。そのため、次時では実際に身体を動かしながらルールの工夫を考える時間を設けた。また、第 6 時では学年で足並みを揃えて行っていることに気づいた生徒が「他の学級と勝負する時間が欲しい」という発言があり、本実践では生徒の学びから学習を変化させていくため、Our Sports を共有する時間を新たに設け、単元計画を以下の様に変更した。

時数	学習内容
7	【Our Spots を楽しむためには】 ・Our Sports をより楽しくするために、ルールの工夫を考え、共有すること。
8	【〇〇りんぴっくを楽しもう！】 ・奇数クラスの Our Sports を用いて偶数クラスと共有し〇〇りんぴっくを楽しむ！
9	【もう一つの〇〇りんぴっくを楽しもう！】 ・偶数クラスの Our Sports を用いて奇数クラスと共有し、もうひとつの〇〇りんぴっくを楽しむ！

**資料 31 変更後の単元計画**

第 7 時では、Our Sports の課題を実際に身体を動かしながら解決策を考える時間となった。本時では、ゲームを中心に体を動かしながらルールを再構築した結果、サーブに関するルールに変容が見られた。実際に身体を動かしながら改めて Our Sports をよりよく改善しようと試行した結果、新たに以下のルールを追加することになった。

・片手がついていけばお尻が浮いても良い。

**資料 32 第 7 時で追加されたルール**

また、生徒は以下の様に振り返っている。

・自分たちのやりやすいようにルールを変えられるのでより楽しくできた。次回からボールが硬い方にもどるので、またやりやすさが変わるかもしれないと思った。3 組のルールがどんなのか気になるなと思った。

・みんなそれぞれやりやすさがあるから、全員が同意するようなルールを作るのが難しかったです。ルールを変えるとバレーが簡単になったりしたので誰でも得手不得手なくてよかったです。3 組のルールでやるのも楽しみです。

・自分たちで決めたルールにまた自分たちで決めたルールを追加して、このルールでいい、っていう人もいれば前のルールに戻したいという人もいました。僕は、シッティングバレーボールというのは元々お尻をつけることを前提として行なっているスポーツなので、お尻を浮かしてしまったらシッティングバレーボールの良さがなくなってしまうと思います。

・ゲームをしながらルールを考えるとゲームが一段と楽しくなる。次は対決、全部勝てるよう頑張りたい。

**資料 33 第 7 時の振り返り**

これらの記述から、身体を動かしながらルールを考えることで Our Sports をよりよくすることができた。



## 【第8・9時】“試行から至高を目指して”

試行的に自分たちで創ったスポーツを用いて、他の学級との対決を行うこととなった。題して“きりんぴっく”と“あおりんぴっく”である。きりんぴっくは、奇数学級の団色、あおりんぴっくは、偶数学級の団色を用いて名前をつけて、各時間で互いに共有して楽しむ時間を設けることとした。



資料34 「きりんぴっく」の実際



資料35 「あおりんぴっく」の実際

- ・キリンピックをやってみて、3組のルールで、膝立ちでやると膝が痛くなって大変だった。3組とやって、取り入れたいルールと取り入れたくないルールがいろいろあった。合同試合はすごく楽しかった。
- ・3組のルールは難しかった。サーブでほぼ決まってしまうのであまりラリーが続かなかった。でも立ち膝だとサーブも入りやすいし、ブロックもやりやすいので良かった。4組のルールの方が誰でもボールが触れるんじゃないかと思った。違うルールでやってみるのもたのしかった。

資料36 第8時の振り返り

これらの記述から、他学級とスポーツを共有することで自分たちの改善点を見つけることや自分たちで創ったスポーツの良さを改めて実感することができると考えられる。また、違うルールに触れることも、違った楽しさを感じれるということが明らかとなった。以上の授業の実際と考察はVIに詳しくまとめた。

### (5) 授業の実際と考察（抽出児Dを対象として）

本実践において、筆者がとくに「気になる子」として、追っていた抽出児Dを最後に紹介する。抽出児Dは、運動することが苦手で体育の授業も苦手と公言している生徒でもある。普段の授業では、苦手だが「成績のためにがんばる」姿をよく言っていた。第7時での振り返りでは、「楽しかったのですが、戦犯しすぎて…」と、自分が原因で負けたと感じている。以下の示すものは、第7時の振り返りである。

投げサーバが強すぎます。あと立ち膝も消した方がいいと思いました。楽しかったのですが戦犯しすぎて心が痛いです。サーブでしかまともに点が取れませんでした。全敗したので次は頑張ろうと思いました。

資料37 抽出児Dの振り返り

しかし、授業映像を確認すると、Our Sportsを全力で楽しんでいる姿が見られた。次時では、自ら得点を決めてガッツポーズをする姿が印象的であった。



資料38 第8時の抽出児D

第4時で体験した時は「あぐらをかいてプレーする姿」、第7時では、「ボールに飛びつく姿」、第8時では、「自ら得点を決めてしている姿」と、単元を通して大きく変容していったことが明らかとなった。



資料39 第4時と第7時での抽出児Dの変化

このことから、自分たちでスポーツを創造することで苦手意識を持っている生徒も全力で楽しむことができるようになったと考えられる。しかし、振り返りでは「戦犯」と記載する回数が多かったため、そこを楽しく感じるような手立てを授業者として行う必要性を感じた。

## VI 本研究における成果と課題

本研究は、愛知県内公立中学校第3学年を対象とし、2年にわたって体育理論領域と球技領域を関連付けた実践での成果と課題をまとめると以下ようになる。

### (1) 研究のまとめ

以下に示すものは、単元を通して記述した生徒の振り返りである。これらの内容から成果と課題を見出す。

「実際にやってみてルールを考えるのはすごく楽しかったし、誰でも楽しめるってなんだろうと普段から考える良い機会になったと思うので、この授業は有意義な時間だったと思った。中3になって、男女で体格や能力の差がだいぶあると思うけど、ルールを皆で考えれば共にスポーツを楽しむことができるんだと実感できた。」

「クラスが違うとルールが全く違って、面白かったです。それぞれ違ったところが工夫されていました。誰でもできるようにルールを変えるとみんなで楽しくできたので、今回の授業内容を他のスポーツでも生かしたいと思いました。」

「今までの体育は男子、女子でわかれてやってきました。ですが、今回のシッティングバレーは男女共同でやりました。最初は男女共同で不安な気持ちがありましたが、やっていくうちにチームワークが高まっていくのがとてもわかりました。正直楽しくないって思った時もありましたが、どんどん楽しくなっていく、最後の授業はとても楽しいという気持ちで終ることができてよかったです。」

「あおりんぴっくをやって、キリンピックよりルールが楽しかった。男だけでやる、女だけでやるでもおもしろいけど、異性とやることで、さらに楽しくなって、クラス全体でやることで、クラスの仲も深まって良かった。」

「シッティングバレーボールに限らずだいたいスポーツがそのままのルールだと難しいけど、ルールを変えて簡単にすれば、色々な人が楽しめるようになるんだなということが分かりました。ルールを変えてスポーツをするなんてことは無かったので、良い経験になりました。」

#### 資料 40 単元を通した生徒の振り返り

### (2) 成果

- 体育理論で学んだ知識(形式知)と実際に身体を介して気づく知識(暗黙知)の両方を関連付けて、ルールや行い方を工夫することができた。
- 「する・みる・支える・知る・調べる」などの関わり方の他に「創る」ことも新たな関わり方として考えても良い。
- 領域間カリキュラム・マネジメントさせた授業を通して「体格差」「性別差」「技能差」を超えるために思考を働かせて、誰もが楽しむことができるスポーツを創造することができた。

成果から考察できることは、以下の3点である。

- ①教師が意図的に体育理論と球技の学習を関連付け、カリキュラム・マネジメントした結果、その後の授業において知識を活用する生徒が増加したと考えられる。
- ②「する・みる・支える・知る」などの多様な関わり方だけでなく、「創る」ことも関わり方の1つである。これは、生徒の振り返りでもあるように、自分たちでルールを変えて楽しむことは、自分たちで創ることに親しみを持っているからであると考えられる。
- ③“誰もが楽しむことができるスポーツ”を創造する過程で自然と「体格差」「性別差」「技能差」を超えることができていると考えられる。

以上で述べたことが本研究での成果となる。一方で課題も残る実践となった。

### (3) 課題

- ▲誰もが楽しむことができるスポーツを創造する過程で特別支援学級生徒も共に学習する機会を設けることができなかった。
- ▲Our Sports を共有し、他学級の状況を知ることで自分たちのスポーツを再構築する時間を設けることでより深い学びにつながる。
- ▲研究の限界であったが、全9時間完了で領域間を関連付けた実践は生徒の技能向上を考慮すると、時間数が不足している。

課題から考察できることは、以下の2点である。

- ①中学校第3学年を対象に実践を行ったが、特別支援学級の生徒は学習に参加する機会を一度も設けることができていない。これは、通常学級と特別支援学級の時間割の違いや障害の有無等を考慮した結果である。しかし、誰もが楽しむことができるスポーツを各学級で創造している以上、共に学習する機会を設けることで一人ひとりがよりよい学びにつながるのではないかと

- ②他学級と Our Sports を共有した結果、自分たちでは考えることができなかったルールや行い方に触れることができていたため、そこで感じたことや学んだことを踏まえて改めて自分たちのスポーツを考える時間を設けることで深い学びにつながるのではないかと。

### (4) 今後に向けて

本研究は、教科・領域内を横断的な視点で学習を充実させるために「領域間カリキュラム・マネジメント」を取り入れ、中学校第3学年での体育理論領域と球技領域を関連づけた実践を行った。授業内での生徒の思考や試行を通して学習を変化させていった結果多くの成果と課題が浮き彫りとなった。この成果と課題を改めて考えると共に、今後については「体育理論領域」のみならず、教科・領域内に関連を持たせた保健体育の授業づくりと生徒の実態に合わせて教材を変化させていく授業を目指していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編』, 東山書房
- ・佐藤豊・友添秀則(2011)『楽しい体育理論の授業をつくろう!』, 大修館書店, pp. 1-10.
- ・石塚諭、小松理那、鈴木剛(2020)保健体育授業における男女共習化が生徒の学びに及ぼす影響, 宇都宮大学教育学部研究紀要, 第70号, 別刷, pp. 277-289.
- ・吉田文久(2016)学校体育における「体育理論」の新たな位置づけとその授業づくり(その1)-「文化としてのスポーツ」の学びを位置づける授業の構想に向けて-, 日本福祉大学子ども発達学論集, 第8号, pp. 1-14.
- ・日野克博(2018)「体育分野(体育理論領域)と保健分野を関連付ける保健体育科の授業づくり」, 体育科教育研究, 34巻, pp. 53-58.
- ・鈴木一成「体育の『見方・考え方』をみて運動・スポーツを『知る』とは?」, 『体育科教育』, 10月号, 大修館書店, 2017, pp. 36-38.
- ・濱田幸史「主体的・対話的で深い学びを実現する授業スタイル」, 『体育科教育』, 1月号, 大修館書店, 2021, pp.28-30.
- ・中村和弘「カリキュラム・マネジメントによる授業改善-教科・領域の学びをつなぐ-」, 『hito\*yume』, 24号, ぶんけい, 2017, pp. 12-13.
- ・秋田喜代美(2020)「見通し・行動・振り返り」の繰り返しが、生徒自身の幸せな未来創造へとつながる」, 『Career Guidance 2020 DEC』435号, pp. 28-29.
- ・一般社団法人 人生100年デザイン財団, “開放系の試行錯誤のプロセスそのものが学び-AAR 循環について-” 2020-10-27, 【[www.100design.or.jp/event/aar/](http://www.100design.or.jp/event/aar/)】(参照 2022-01-10)

#### 【付記】

本研究にあたり、連携協力校の校長先生をはじめ、教務主任の先生、保健体育科の先生方や指導教員の鈴木一成先生を含め、多くの先生方の温かなご指導や助言によって有意義な実践を行うことができた。また、うまくいか不安であったが、子どもたち楽しんでいる姿や言葉から、何度も救われた実践であった。この出会いに感謝したい。本当にありがとう。そして、これまでに学んだことを最大限に活かすとともに、教育現場に還元していく決意である。